

枚方宿 ～鍵屋とくらわんか舟～

江戸時代に置かれた枚方宿は京都大阪の中間あたりに位置し、街道の貨客輸送の中継地であり、淀川往来の旅客船や貨物船の船着場も設けられ、水陸交通の重要な場所でもありました。

この枚方宿で営業していた宿屋のひとつが「鍵屋」です。江戸後期以降は街道を行き来する人々の宿、淀川往来の船を待つことができる宿「船待ちの宿」を営んでいました。近代以降は料亭・料理旅館として平成9年（1997年）まで営業を続けていました。その後、解体・復原工事等を経て、平成13年（2001年）に「市立枚方宿鍵屋資料館」として開館しました。

資料館の建物も見所のひとつですが、「枚方宿」に関わる古文書や出土遺物、模型、民俗資料も充実しています。

「くらわんか舟」とは、江戸時代に京都伏見と大阪（坂）八軒家の間を往来する旅客船（三十石船）に近寄り、乗船客に「餅くらわんか、酒くらわんか」と乱暴な言葉で飲食物を売っていた煮売茶船で、通称「くらわんか舟」と呼ばれています。「くらわんか」とは、方言で「食べないか？」の意味です。

地元の乱暴な言葉遣いのまま飲食を売ってもかまわないという不作法御免の特権が与えられたため、身分の高い人に対しても「くらわんか」と叫ぶことが許されていたともいわれています。

客とのやり取りが面白いと淀川往来の名物となり、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」に登場したり、浮世絵師の歌川広重の「京都名所之内 淀川」に描かれたりしています。

この船で売られていたという「ごんぼ汁」。「ごんぼ」とは「ごぼう」のことで、現代に伝わる「ごんぼ汁」はごぼうと卵の花を入れることが特徴の汁物です。枚方市では料理屋や学校給食やイベントで提供されるなど、郷土料理の代表格です。

「くらわんか」の名前は茶碗にも残っています。枚方宿遺跡からは、江戸時代の陶磁器が多く出土しています。江戸時代後半の厚手で素朴なこれらの器が特に「くらわんか茶碗」と呼ばれるもので、おそらく「くらわんか舟」の商売でも使用されたと考えられています。

「くらわんか舟でつかわれた器」という意味でこの名が後世に使われるようになり、今では庶民の器の代名詞にもなりつつあります。

「くらわんか舟」は明治に入ると、淀川蒸気船の登場で、三十石船がなくなるとともに姿を消していきました。この蒸気船も昭和初期頃から陸上交通網の整備が広がり、舟運（船を使って人や物資を輸送すること）は衰退しました。

しかし、近年では淀川の舟運が防災や観光の役割を担う重要な手段として見直されており、枚方船着場（枚方緊急用船着場）と八軒家浜船着場の間で定期的に舟運イベントも行われています。



〈引用・参考〉

市立枚方宿鍵屋資料館ホームページ・リーフレット・展示パネル
特定非営利活動法人 枚方文化観光協会パンフレット
国土交通省 淀川河川事務所ホームページ

（文責 地活 吉山美和）

